

考古学 Archaeology

まつ
松木 武彦
たけ
ひこ

キーワード：考古学的文化、縄文、弥生、古墳、騎馬民族、初期国家、照葉樹林文化、水稻農耕

はじめに

考古学とは、人間が残した物質的痕跡から過去を復元して洞察する学問である。歴史学のほか、国際的には人類学・社会学・教育学・芸術学など、さまざまなコンテキストにおいて考古学の研究や社会実践がなされている。

日本では、考古学の研究は、もっぱら歴史学というコンテキストにおいて行われている。日本の歴史学を支える両軸は、文字資料（史料）を扱う文献史学と、物質資料（考古資料）を対象とする考古学である。文字資料が増える奈良時代以降の歴史学は文献史学が主体となるが、文字が存在しないか、記録としての信憑性（しんぴょうせい）も含めて

文字がまだ少ない古墳時代以前の歴史は、考古学が担うところが大きい。逆に言えば、考古学がセンターに立つ日本史研究の舞台は、ほぼ古墳時代以前ということになる。約三万七千年前に始まる旧石器時代から六世紀いっぽいくらいまでが、日本では考古学の時代である。

ただ、その時代に「日本」が存在していたかどうかは疑わしい。

というよりもむしろ、いつどのようにして「日本」が生成されたのかという問題が、考古学における日本研究の主眼となる。

そこでさらに派生する二つの問題がある。第一は、生成を解明すべき「日本」の実体をどう捉えるかという問題である。そもそも「日本」という名称が国号として定着したのは、確實には八世紀であり、それまでは「ヤマト」（用字はさまざま）などと自称し、また

中国や朝鮮半島の諸王朝からは「倭」と他称されてきた。「ヤマト」などの自称の対象となつた人間集団・政治組織・領域などのアイデンティティは、いつどのようにして出来あがつたのか。また、「倭」などと他称された人間集団・政治組織・領域は、いつどのようにして外部の人々の眼に一体として像を結ぶようになったのか。

第二は、そのような自己意識や他者認識としてのみ実体化されていた古墳時代以前の「日本」ないしその前身を、考古学のどのような手法によつて復元できるのかという問題である。その際、日本の考古学で必ず参照されるのは、オーストラリアに生まれ英国で活動した考古学者V・G・チャイルド（一八九二—一九五七）の「考古学的文化」の概念である（チャイルド 一九六四）。考古学的文化とは、繰り返し共伴する遺物・遺構の型式の組み合わせ（assemblage）のことであり、その背後には一つの人間集団（people）の存在が想定された。したがつて、現在の日本の領域と重なるように特定の考古学的文化が現れ、その背後に連続的に構成につながる人間集団の存在が認められれば、人間集団としての「日本」の生成がそこに想定できることになる。

後述するように、考古学的文化の概念は、それが発祥した英國では一九七〇年代から厳しく見直されるようになり、今日では上記のような単純な思考のプロセスがそのまま考古資料に適用されることは日本でも少ない。しかし、考古学的文化の認識から人間集団の歴

史を復元していく試みは、考古学の発展期以来、古典的方法論として明確な大枠を形成し、現代においても修整や見直しを重ねつつ受け継がれている。この大枠を一つの評価軸として、「日本」の生成に迫ろうとした考古学の著書のうち主要なものを見ていきたい。

なお、日本考古学の現状での本質は実務主義であり、遺構や遺物の編年、分析、年代測定など、対象や方法が細分化された作業に取り組むところから研究者のキャリアが始まる。歴史理論、国家形成論、時代区分論、あるいは本巻で取り組む日本文化研究のような審級の仕事は、若いうちにはまだ取り組める環境になく、またそういう傾向は近年ますます強まつてゐる。国際学会で欧米の（いや近年はアジアの人も含めて）若手研究者が壮大で挑戦的な発表を盛んに行つてゐるのを見ても、あたら若い才能をもつぱら細かな実務研究（それも大切ではあるが）のみに注ぎこまるるをえない日本考古学のこのような環境を筆者は深刻な問題だと感じるが、かといつてこうした事情ゆえ、本巻で推奨されるようなフレッシュな書き手によるチャレンジングな近年の日本研究を、日本考古学の中に見出すことが今はできない。おのずと、選択は大家の歴史的業績に偏り、以下それらを軸に据えつても、今後発展しそうな視点を宿した近年の中堅以下の著作にもできるだけ触れたい。

一 江上波夫『騎馬民族国家——日本古代史へのアプローチ』（中公新書、一九六七）

敗戦まもない一九四〇年代の末から五〇年代の初めにかけて、当時四十年代前半だった東洋考古学者の江上波夫が、いわゆる「騎馬民族征服国家説」を主張した。この説には、反論に対する随時の修正なども含めて多くのヴァージョンや部分的叙述が存在するが、本書はもつともまとまった形として出版され、現在でも入手しやすい。

その骨子は、大陸で发展した騎馬民族が朝鮮半島に南下してそこを支配し、四世紀の後半には海を越えて九州に上陸、五世紀には近畿に広がって在來の勢力を圧倒し、それと合作しながら新たに征服王朝を打ち立てたことが日本国家の起源となつたとするものである。

考古学的文化をとらえて背後の人間集団の動きを読むという、先述の手順そのものへ明確な方法的意識は、江上の記述の中には見てとれない。しかし実際には、古墳の副葬品として出土する馬具・武具および北方系文物からなる要素群を考古学的文化ととらえ、記紀も含めた文献資料の記述も動員しつつではあるが、そのような考古学的文化の背後に騎馬民族という人間集団を指定する点では、考古学的文化の認識から人間集団の歴史を復元していくという古典的大枠での代表的試みといえる。

この説の最大の方法的特徴は、古墳時代を境として、日本列島主要部の支配層の考古学的文化が南方的・農民的・平和的なものから北方的・武人的・戦争的なものへと不連続に交代するととらえ、それが、それぞの背後の人間集団の不連続的交代を示すと解釈することにある。したがつて、この説がはらむ考古学としての方法的問題も、①考古学的文化の交代はありえたのか否か、②考古学的文化がストレートに人間集団を反映するか否か、という二つの点に整理できる。

事実、①の点については、前方後円墳の存続に端的に認められるように、騎馬民族が到来したと江上が主張する時期の前後で、考古学的文化に画期的な変化や断絶はないとする批判が説の提唱直後から寄せられ、これが日本考古学から江上への反論における基本的な潮流となつた。江上による古墳時代の考古学的文化の設定が、当時の日本考古学の調査・研究の成果により遺構・遺物の型式レベルで吟味を重ねてのものではなく、恣意的・感覚的で曖昧な水準にとどまつていた点も大きな瑕疵である。②については、考古学的文化を、人間集団の中でもとくに「民族」に安易に直結させていることが、ナチスによる侵略戦争の「学問的」正当化に利用されたドイツの考古学者G・コツシナの誤謬などとも比較されて批判を受ける流れとなつた（田中一九九一）。

さらに根本的な逆風となつたのは、歴史学やそれを取り巻く人文

科学で強まり始めた新たな思潮である。進取の気性に富む機動的な

遊牧集団が、保守的で定住度の高い農耕集団を征服することによつて国家や王朝を生み出すというシナリオ自体は江上オリジナルのアイデアではなく、古くから国家形成の一つのパターンとして認識されてきた。西アジアのヒッタイト、エジプトのヒクソス、中国の元・清などのいわゆる征服王朝などの多くの例があげられ、江上の騎馬民族征服国家説は、このパターンを日本の国家形成に当てはめようとしたものにほかならない。皇国史觀崩壊の直後、歴史叙述を通じて「何ら特別でない」日本と、「世界によくある」その形成過程を描き出したのである。

しかし、この種の国家形成論は、征服や侵略をした集団の内部矛盾、された側の社会の主体性など、実証の精度、視点の多角性や双方向性、理論の細やかさなどが追究された二十世紀後半の歴史学界の中では時代遅れとみなされつづつあった。征服や侵略のような暴力が歴史を演出したとみることも、民主主義に根ざした戦後歴史学の好むところではなかつた。ちょうど並行して、ユーラシアの反対側の西ヨーロッパで盛んであり、騎馬民族征服国家説とよく似た構造をもつ「ケルト史觀」に対しても同様の逆風が吹いたことはけつして偶然ではなく（松木 二〇一七）、騎馬民族征服国家説から影響力を奪つたのは、日本考古・歴史学界のダメステイックな反論というよりもむしろ、本質的には世界の思想的潮流であつたといえるので

ある。

騎馬民族征服国家説やケルト史觀へのこのような逆風は、それらが内包した旧来の考古学的方法論、とくに「考古学的文化」の設定と解釈に修整や変更を迫る動きをもはらんでいた。すなわち、両者が「騎馬民族」や「ケルト人」の存在証明とした考古学的文化の要素設定の恣意性（れいせいせい）とあいまいさに対する留意は、日本考古学においては考古学的文化を構成する諸要素をより厳密かつ包括的に吟味する方向性につながり、ヨーロッパ考古学の一部においては考古学的文化という概念そのものを否認ないしは「脱構築化」する動きに合流した。また、考古学的文化という概念を保持する立場においても、それが特定の人間集団を反映するというテーゼは爾後（じご）大きく後退し始め、現在では、集団を超えた器物や意匠の流行、地位や職能の表明、情報の流通、技術の共有など、流動する社会の一局面がさまざまなものからニズムで人工物に反映された現象と理解されることが多くなつた。

二 都出比呂志『古代国家はいつ成立したか』

（岩波新書、二〇一二）

考古学的文化を以上のようにとらえてしまつと、考古学からする

「日本」や「日本人」、「倭」や「倭人」の議論は望みえないものになつてしまふのであらうか。江上の騎馬民族征服国家説と同じく古墳時代に日本の成り立ちを求めながら、別の視点と方法でそれに迫つたのが都出比呂志である。農耕社会の成立という社会経済的な側面から日本の弥生・古墳時代の史的過程を考察した成果を一九八〇年代末に上梓したあと（都出一九八九）、一九九〇年代からは古墳を主対象として政治組織や国家体制が生み出されるプロセスに研究の主眼を置き始め、二〇〇五年に成果をまとめたのち（都出二〇〇五）、二〇一一年に一般書としてそれを簡潔な歴史叙述にまとめたものが本書である。

本書の論点は多岐にわたるが、ことに日本研究に関して重要な点は、古墳時代の開始とともに、日本列島の広範囲に文化的共通性が現れ、それが「われわれ仲間」という共通の帰属意識をもつ集団を形成したと考える点である。具体的には、前方後円墳という同じ形の墳墓のほか、鏡・大刀のような有力者の持ち物から鉄・須恵器（陶器）などの生活物資にいたる流通網、鉄器・方形住居・カマド、滑石や須恵器の祭祀、個人別食器からなる土器様式などに反映された共通の生活と信仰の様式などが、列島主要部のほぼ全域——九州南部から東北南部まで——を覆うことを重視する。さらにこの範囲に、巨大な前方後円墳を頂点とする古墳の規模と形で身分や地位を表示し、相互に承認する政治的なシステム（前方後円墳体制）が形

成されたとし、それを日本において初めて生み出された初期段階の国家（初期国家）と考えた。

すなわち、考古学的文化という考え方の枠組みに照らした言い方をすれば、古墳時代には列島の広い範囲が一つの考古学的文化で統合されたことに、都出は注目するわけである。同じようにその画期を古墳時代に求めて日本の国家の形成を説いた騎馬民族征服国家説と異なるのは、第一に、考古学的文化のとらえ方が恣意的・感覚的な方向に走ることなく、生活・経済から政治・軍事および信仰・思想までのさまざまな局面を反映した考古資料の型式を網羅する、総体的なものである点である。さらに第二として、これに先立つ弥生時代の考古学的文化をも都出は分析し、それとの連続と断絶とを比較することによって、まずは日本列島内部における古墳時代の考古学的文化の生成経緯を浮き彫りにしたことである。騎馬民族征服国家説がもつとも欠いていたこのような周到性ゆえに、都出の説は、最初の発表から約四半世紀を経た現在においても、日本の国家と民族の形成を、考古学によつてもつとも着実に把握した論の一つとみなされている。

ただ見逃せないのは、このときに文化的共通性が生まれた範囲は九州南部から東北南部までで、それより外側の琉球諸島と東北北部・北海道はそこに含まれないことを明言する点である。日本や日本人、日本国の成立を南と北および中の三つに分けてとらえるこう

した理解は、古墳時代よりもさらにさかのぼる縄文時代から弥生時代への歴史過程を叙述するときの大きな枠組みとして、次項で述べるように都出以前から定着していた。

三 三つの日本文化論と縄文・弥生対置論

このような南・北・中の三分説、あるいは南北を一つにまとめてそれと中とを対置する二分説に則つた日本・日本人・日本文化の形成論は、形質人類学・文化人類学・考古学の三者が合一して形作つた巨大な潮流として、現在でも有力な定説の位置を失つていなければかりか、近年本格化したDNA分析などを用いる遺伝人類学の成果によつて補強される局面もみられる。

この説の自然科学的基盤を供し続けているのは、形質人類学の埴原和郎による「日本人」形成の二重構造モデルで、埴原和郎『日本人の成り立ち』（人文書院、一九九五）にそのエッセンスがある。す

なわち、現代の日本人は、縄文時代の南方系モンゴロイド集団に、弥生時代以降に渡来した北方系モンゴロイドが混交することによつて形成されたと埴原は述べる。さらに、移住と混交がもつとも進んだ列島中央部と、それがほとんど及ばなかつた南部および北部との間で集団の違いが生じ、それぞれが「本土人」と「琉球人」および

アイヌへとつながつたのではないかと考えたのである。

その北方系モンゴロイド集団の最初の大規模な渡来を、考古学では弥生時代の始まりと関連づけてとらえた。すなわち、水田および大陸系磨製石器（石包丁・伐採用石斧・加工用石斧・石劍・石鎌）、環濠集落からなる考古学的文化を、朝鮮半島南部から渡来して水稻農耕を始めた集団の存在を証明とし、この「渡来人」集団が日本列島で最初に水稻農耕を営んだことを弥生時代の開始と定めるに至つたのである。この考古学的文化は、その後数百年をかけて、要素を欠落・変容させながら九州から東北までの広い範囲に広まつたが、諸要素の中でも殊更に水田（水稻農耕）の存在が重視され、ともかくも日本列島の中でそれが到達したところまでが「弥生文化」の範囲と規定されて、それが「中の文化」として本土の日本人・日本国・日本文化の源と理解されるようになつた。都出の言う国家や民族の形成も、この「中の文化」の内側で行われたことになる。

考古学の立場から、「中の文化」の両側に「北の文化」と「南の文化」の分化と発展の軌跡を具体的に描いて強調し、日本および日本人や日本の國の成り立ちを多様かつ複眼的な視点でみるべきことを明確に説いた重要な仕事として藤本強『もう二つの日本文化——北海道と南島の文化』（東京大学出版会、一九八八）がある。そもそも「中の文化」という言葉もこの本で藤本が使用したことでポピュラーになつたし、「中の文化」と「北の文化」、「南の文化」それぞれ

との間に、接点としての「「ボカシ」の地帯」があることを明示したものも藤本である。「ボカシ」の地帯を間にはさんで北・中・南の文化が並ぶという、日本の文化の多様性とその空間的構造の図式は後の研究枠組みにも影響を与える、「北の文化」「北と中のボカシ」「中と南のボカシ」「南の文化」にあたるところをそれぞれに解説する、考古学の充実した仕事が後に続いている（木下 一九九六、瀬川 二〇一六、東北・関東前方後円墳研究会 二〇一四、藤沢 二〇一六年など）。

いっぽう、文化人類学からの追究で中心となつたのは、日本の生活文化の基層として、中国雲南省周辺を中心として現代にも見られる「照葉樹林文化」を想定し（佐々木 一九七一、中尾 一九七八、二〇〇七）、それをとくに縄文文化と結びつける視点であった。先述のように、縄文文化は北・中・南すべての文化の先行形態であると理解されていたわけであるから、すくなくともその一部が照葉樹林文化という概念でとらえられるということは、中の地域に水稻農耕の文化がかぶさつてきた弥生時代以降もそれは「基層」「深層」として潜在的に残り、水稻農耕が伝わらなかつた北・南の地域ではもつと顕在的に残つたという、いわゆる「縄文基層文化論」につながつていった。梅原猛『日本の深層——縄文・蝦夷文化を探る』（佼成出版社、一九八三）は、こうした論調を作つた人々のうちでも社会的な影響力がもつとも大きかつた著者の手になるものである。

縄文文化についての梅原の著作は、考古学の専門研究者からはきわめて厳しく批判されたり無視されたりする傾向が強かつたいっぽう、市民の間で大きな人気を得た点において、先述の騎馬民族征服国家説ときわめてよく似た社会的インパクトをもつた。騎馬民族征服国家説が皇国史觀に替わる新しい歴史への希求に応えたように、縄文基層文化論は、高度経済成長や科学文明に倦み、その矛盾や行き詰まりに直面した社会の過去回帰欲求をよく刺激したといえよう。伝統的な考古学の専門的立場からは、縄文時代の考古学的事象をより厳密かつ正確に踏まえることや、「文化」という概念の実体をさらに科学的に追及する必要性などが、梅原の所論を中心とする縄文基層文化論には求められる。ことに、科学的には個々人の脳と相互の伝達が生み出す現象である「文化」に「基層」や「表層」のようなものが存在するのか否かについては、近年進展した認知科学や脳科学に立脚した認知考古学の立場から批判がある（松本二〇一二）。しかしながら、このような要望や批判を十分に認めたうえで留意したいのは、梅原らの言説が、それまでは関心のなかつた人も含めて多くの人々の関心を縄文時代に向けさせ、過去と対話する機会を開いたという点である。縄文時代の遺跡の保存と活用のその後にも、それは大きな影響を与えた。現代社会と考古学との関係を考えるパブリック・アーケオロジーの国際的議論に照らしても、学問としての考古学の役割が何なのかを考えさせる事例である。

このような社会との関わりでいえば、縄文と弥生とを二項対置的

に演示する試みもしばしばなされ、話題を呼んでいる（梅原・中上一九九四、国立科学博物館・国立歴史民俗博物館ほか

二〇〇五）。

生態や自然を重視する思想を代弁するかのようない在來的「縄文」と、科学技術や現代文明につながる印象を与えた外来的「弥生」のいずれに共感するかという問いは、学界に起源し、マスコミなどを通じて日本の市民に投げかけられる一種の遊びであるが、日本や日本人としてのアイデンティティを一元回帰的ではなく二者択一的に考えさせる点は、考古学が作り出した源流としての日本論・日本人論の特徴として興味深い。

もちろん、縄文と弥生の関係については、最新の資料や認識によつて、学問的な考古学の考究も進んでいる。近年では、弥生文化と縄文に由来する文化とは一定の期間併存し、後者が前者に影響を与える局面があつたことなどを、設楽博己『縄文社会と弥生社会』（敬文舎、二〇一四）が明快に説いている。また、その際の列島人の主体性を高く評価し、弥生文化が一概に外来の文化と言いつ切れないことに踏み込んだ寺前直人『文明に抗した弥生の人びと』（吉川弘文館、二〇一七）も、今後に大きな影響を与えるよう。縄文と弥生の関係に関するこれら近年の研究が、ともすればステレオタイプに堕しつつある縄文・弥生対置論を脱構築化していく動きを導くことが期待される。

四 「縄文」「弥生」「古墳」三概念見直しの動きと日本研究

これまでの各項およびそこで取り上げた著書や言及した論考は、いずれも「縄文」「弥生」「古墳」という文化と時代の basic 概念を枠組みとして叙述された日本研究の業績である。しかし、この三つの概念は、日本のみに適用されてきたもので、それ以上の広がりや国際的普遍性はいつさいもたない。日本国や日本人、ひいてはその前提となる日本語までもが形成されているかどうかわからない先史の段階に、その存在をアприオリに前提としたこのような概念を用いて日本の形成を論じること自体、循環論的な誤謬に陥る危険をはらんでいよう。その危機意識にも動かされて、日本の過去のとらえ方にかかわるこうした枠組み自体を見直し、再編成しようとする動きが、近年目立つようになつてきた。

この三つの概念は、もともと、明治以降の考古学の営みの中で形作られてきたもので、第二次世界大戦前までに、年代的な関係も含む三つの歴史的相互関係については今日につながる基本的なフレームに近いものがほぼ出来上がつていたという古いものである。それだけに、当時の学問的・資料的限界に制約を受けたり、折々の政治的・社会的情勢に影響されたりして、今日の水準で見れば不足や矛盾が目立つ。もちろんマイナーチェンジは繰り返されてきたが、そ

れでしのぎうる限界を超えたあるのではないかという感覚が、考古学研究者の中でも先端的な一部の間では共有されつつある。

まず、山田康弘『つくられた縄文時代——日本文化の原像を探る』（新潮選書、二〇一六）は、縄文時代と弥生時代という概念が、第二次世界大戦前までに積み重ねられてきた認識によりながらも、食料の採集から生産への「発展」をはらんだ年代的先後関係にはつきりと位置づけられたのは、高度成長期を迎えたとしていた一九五〇～六〇年代のことであつたとする。さらにそれは、一九五一年のサンフランシスコ講和条約を経て国家としての再出発を果たし、高度成長という「発展」の時期を迎えるとしていた当時の体制や思潮のもとで、いわば政治的に作り出された動きであつたとみるのである。縄文・弥生という考古学の用語や概念の成立や変転の背景に近代以降の日本の歴史的展開を見ようとする、新しいメタ的視点での考古学による日本研究の試みともいえよう。

藤尾慎一郎『弥生文化像の新構築』（吉川弘文館、二〇一三）は、また別の視点から、弥生文化という概念の見直しを提案する。藤尾は、弥生文化を「灌漑式水田稻作を選択的生業構造の中に位置づけた上でそれに特化し、一旦始めれば戻すことなく古墳文化へと連続していく文化」と定義しなおした。そうすると、たとえば一度水田稻作を始めたながらも元の採集狩猟社会に戻つてしまつた東北北部は、水稻農耕の存在を重視する従来の弥生文化の概念ではその中に含ま

れることになるが、藤尾の提案に従えば弥生文化の範囲外に置かれることになる。生態・生活・社会の実態に応じて弥生文化の多様さを最大限に見積もり、場合によつては別の文化の設定も辞さないというのが藤尾の目下の姿勢であり、こうした取り組みは、日本文化の形成を論じるときの基本的枠組みとなってきた先述の「北・中・南、三つの日本文化論」の根幹にも大きな影響を与えるよう。

私論では、「考古学的文化」すなわち「繰り返し共伴する遺物・遺構の型式の組み合わせ」を重視して文化を設定するという考古学の純粹な方法的基礎に照らせば、水稻農耕という一つの要素だけをことさらに重視し、それさえあれば「弥生文化」としてきた従来の論は合理性を欠き、その成立の背景に、山田が掘り下げたような政治的・社会的背景を想定したくなる。事実、弥生時代前期末～中期の日本列島における考古学的文化の広がりを検討すると、北部九州と朝鮮半島南部とが「水稻農耕、無文の土器様式、武器形青銅器、鉄製農工具」などの組み合わせをもつ同じ考古学的文化の分布域に含まれ、一時的な水稻農耕以外には共通要素をほとんどたない東北地方には、まったく別の考古学的文化を設定せざるをえない。にもかかわらず、水稻農耕のみを錦の御旗のよう掲げて九州から東北までを同じ「弥生文化」の範囲で包み、朝鮮半島南部はその外側に置くという現行の弥生文化設定は、現代の「日本国」という領域を過去に投影したものにほかなるまい（松木 二〇一）。

「考古学的文化」にも照らしつつ、純粹に考古学的な方法でこれまでの枠組みを再検討する試みは、現在、国立歴史民俗博物館の考古学研究者が積極的に展開している（藤尾 二〇一七）。この中で、藤尾も弥生文化に関する認識を前進させ、縄文時代については山田が、古墳時代については松木が吟味を試みている。

五 井上章一『日本に古代はあつたのか』

（角川選書、二〇〇八）

最後に取り上げるのは、考古学による日本や日本文化の生成についての議論を、いかにして国際化し、人類史や人類文化の中で相対化していくかという問題である。

これまでに設定してきた旧石器（先土器）・縄文・弥生・古墳という歴史階梯を、世界史・人類史の普遍的な歴史階梯に当てはめる試みは、従来から行われてきた。先史時代の伝統的な歴史階梯としての「旧石器時代→新石器時代→青銅器時代→鉄器時代」に対しては、縄文時代と弥生時代の前期まで（紀元前四〇〇年前後まで）を新石器時代とし、それより後を鉄器時代にあてるのが現在では普通である。日本列島では、鉄器と青銅器が同時に現れ、もっぱら前者が生活用具に使われるため、青銅器時代が不在ということになる。

いっぽう、マルクス主義の歴史的発展段階論、とくに国家形成を主眼とするエンゲルスの古典学説では、日本列島で国家が形成された時期をおおむね奈良時代に置くのが定説である。ただし考古学では、人類学の社会進化論も取り入れつつ、古墳時代を「初期国家」段階と見る説を、先述の都出比呂志が提起した（都出 二〇〇五）。

もう一つの古典的かつ巨視的な時代区分である「原始→古代→中世→（近世）→近代」との関係について、衝撃的な提言を行ったのが井上章一による本書である。日本の歴史学では明治時代の議論を経て、武士が台頭する平安時代後半以降が中世の起点とされるが、中国史では漢帝国が三国へと分裂するときからを中世とする見方が有力である。井上は、日本におけるこの中世の「遅さ」を問題とした。

先史時代を対象とする考古学の立場からすると、現状の日本歴史学では、国家が確立する奈良時代から古代が始まり、それより前の古墳時代は原始ということになる。しかし、井上が本書で重視するユーラシア的な視点によれば、漢帝国が三国へと分裂するタイミングで、三国のうち魏の強い影響を受けて古墳時代の社会が始まっている。そのようにとらえると、古墳時代を中世に併行させうる可能性が見えてくるのである。

井上は、日本の先史時代のことにも深くは言及しておらず、書名が示唆するように「日本に古代は」ない、という立場なのかもし

- れない。しかし、漢帝国の時期が古代であるとすれば、そことの交渉が北部九州に「王」や「国」を生み出して日本列島の社会の中核を形成していた弥生時代を日本の「古代」とするヴィヴィジョンも見えてこよう。井上のこの著書は、前項で述べた縄文・弥生・古墳という枠組みの見直しとも密接に関連しつつ、考古学による日本や日本人・日本国の生成論に、今後きわめて大きな影響を及ぼすことと思われる。
- 参考文献
- 梅原猛・中上健次 一九八四 『君は弥生人か縄文人か——梅原日本学講義』集英社(集英社文庫、一九九四)
- 木下尚子 一九九六 『南島貝文化の研究——貝の道の考古学』法政大学出版局
- 国立科学博物館・国立歴史民俗博物館ほか(編) 二〇〇五 『縄文vs弥生』読売新聞東京本社
- 佐々木高明 一九七一 『縄作以前』日本放送出版協会(改訂新版、洋泉社、二〇一二)
- 瀬川拓郎 二〇一六 『アイヌと縄文——もうひとつ日本の歴史』ちくま新書
- 明 中公新書
- 藤沢敦(編) 二〇一五 『倭國の形成と東北』東北の古代史2、吉川弘文館
- 松木武彦 二〇〇七 『列島創世記』全集 日本の歴史1、小学館
- 二〇一一 『世界』史の中の弥生文化——環境・認知・文化伝達』『考古学研究』第五八卷第三号
- 二〇一七 『縄文とケルト——辺境の比較考古学』筑摩書房
- 松本直子 二〇一二 『縄文の思想から弥生の思想へ』、丸山直・黒住貢・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座1 古代』ペリカン社、二七〇六四頁
- 都出比呂志 一九八九 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 二〇〇五 『前方後円墳と社会』 塙書房
- (編) 二〇一七 『再考! 縄文と弥生——歴博がめざす日本先史文化の再構築』歴博国際シンポジウム資料集、国立歴史民俗博物館